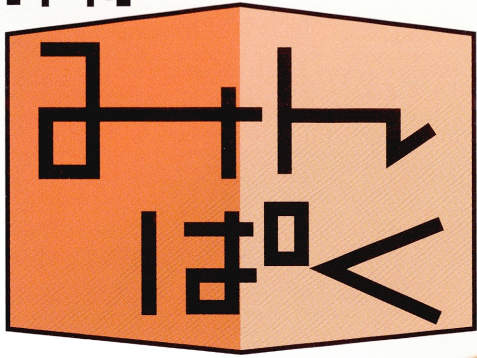


月刊

昭和52年10月5日第1号刊行 ISSN0386-2283
平成19年9月1日発行 第31巻第9号通巻第360号

国立民族学博物館
2007

9



地の先へ。
知の奥へ。
みんぱく
30th
Anniversary

特集

オセアニア

日本人が信じているもの

渡辺康磨

わたなべ やすまる / 1935年東京生まれ。慶應義塾大学経済学部卒業後、日本テレビのプロデューサーとして活動。その後、ドイツ、ミュンスター大学に留学。玉川大学教授、立正大学教授を経て、現在、昭和女子大学非常勤講師。生涯学習セルフ・カウンセリング学会会長。著書は『自分を見つける心理分析』（講談社）、『セルフ・カウンセリング／ひとりでできる自己発見法』（ミネルヴァ書房）など多数。

わたしが小学生のとき、日本は敗戦を迎えました。戦争中、学校の先生は、「天皇陛下のために死ぬことがもっとも価値ある生き方だ」と説きました。ところが、その先生は、戦争が終わった翌日から、「民衆のために生きるべきである」と説くようになりました。

簡単に自分の信じていることを変えた先生に対して、わたしは、「おそらく、先生は天皇も民衆も、本当には、信じていないのだろう。とすると、先生は、何を本当に信じているのだろうか」という疑問を抱きました。この先生に限らず、ほとんどの日本人が、このように、戦前の生き方を簡単に捨て、アメリカから入ってきた新しい生き方を受け入れていきました。そのときの体験が強く心に残っていたわたしは、日本人が抛りどころとして本当に信じているものを、しっかりと突きとめたい、と思つうようになりました。

まず、手始めに、わたしは日本の諺を調べてみました。諺のうちには、普通の日本人の意識が集約してあらわれていると思つたからです。

調べてみると、日本の諺には、「まわりに合わせて生きる」と教えているものが多いことに気づきました。「長いものには巻かれよ」「奇りば大樹の陰」出る杭は打たれる」など、例を挙げればきりがありません。どの諺も大勢に順応することをすすめています。その反対に、

“自分の信するところを貫いて生きよ”と教えているような諺は、まったくといってよいほど、見当たりませんでした。

そのころ、ある人気コメディアンのことばが流行しました。「赤信号、みんなで渡れば怖くない」ということばこそ、日本人の生き方の的を射ていることばだ、とわたしは思いました。

日本人が信じているのは、この“みんな”なのではないでしょうか。この“みんな”は“世間”という替えることもできます。戦前、日本人は、「世間様」に後ろ指を差されないように、「世間の物笑いの種」にならないように、「世間」といって、子どもをしつづけた。この“世間”ということばを、もう少しきちんといあらわすならば、「社会的評価」といい替えることができるでしょう。

後年、わたしは、「現代日本人の自己形成」を自分の学問的研究課題とするようになりました。

わたしたち日本人一人ひとりが、世間の評価の知られから自由になって、かけがえのない人格として生きることができるようになることを願ってきました。そして、わたしは、セルフ・カウンセリングというひとりでできる自己発見法を創り、自己発見運動を展開してきました。



目次

SEPTEMBER 2007 9
月刊みんぱく

01 エッセイ 世界へ世界から
日本人が信じているもの
渡辺 康磨

02 特集 オセアニア

海と島とカヌー
印東 道子

カヴァで語り合う
吉岡 政徳

オーストロネシアン
—ことばで結ばれた人びと—
菊澤 律子

タヒチのタタウ

桑原 牧子

オセアニアの災害文化

林 勲男

「ホエール・ライダー」と
マオリ社会

内藤 暁子

08 モノ・グラフィ

ジョージ・ブラウン・コレクション

林 勲男

10

地球ミュージアム紀行

帆の都市のミュージアム

ピーター・J・マシウス

11

表紙モノ語り

タノアを囲んで

白川 千尋

12

みんぱくインフォメーション

14

万国津々浦々

アーミッシュの人びととのコミュニケーション
—アメリカ合衆国における静かな試み—
鈴木 七美

15

人生は決まり文句で

あいまいな「アーマイ」

磯貝 日月

16

外国人として生きる

人権活動家として、格闘家として

庄司 博史

18

地球を集める

ングルンデリの神話

松山 利夫

20

生きもの博物館

オットセイの受難

和田 一雄

22

フィールドで考える

失せ物を探すには

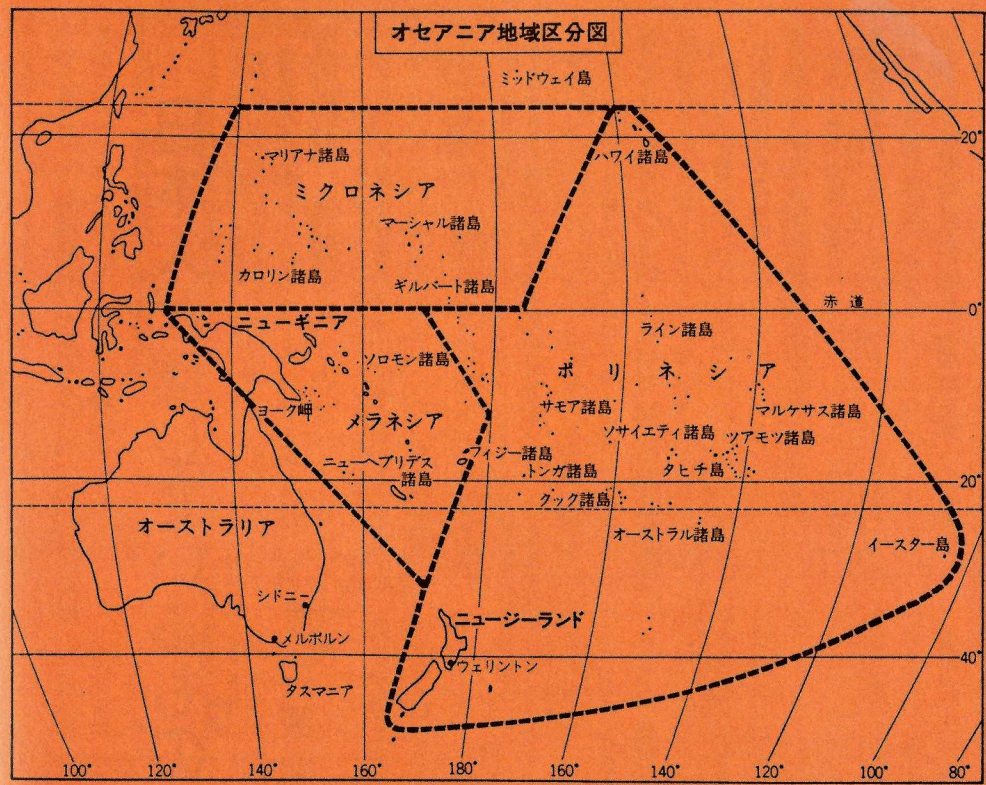
岡部 真由美

24

開館30周年記念事業のご案内

次号予告・編集後記

オセアニア



さまざまな伝統や文化が広がったオセアニア。今月開催の開館三〇周年記念「オセアニア大航海展―ヴァカ モアナ、海の人類大移動」を機会に、特集では「グローバル化のなかでオセアニアの変わらぬ伝統や変わりゆく文化を紹介したい。



世界へ発信されるタタウ(刺青)
(タヒチ・モーレア島)



森のなかのタロイモ畑
(フィジー・カンダブ島)



出航準備をするアウトリガーカヌー
(ミクロネシア・ングル環礁)

海と島とカヌー

印東 道子
(いんとう みちこ)

本館民族社会研究部

三〇〇〇年以上前に植民

地球を宇宙からながめると青く見える。広大な太平洋の青さである。ヨーロッパ人が太平洋の存在をはじめて知ったのは一五二三年にすぎない。そのはるか以前に、日本人と同じモンゴロイド系の人びとがすでに数千年にわたって、太平洋の島々で生活していた。

どうやってこの広い海を渡って多くの島にたどり着いたのか、その不思議はさまざま

さまざまな説を生み出した。「オセアニアの島々は、大陸が沈んだ名残で、生き残った人が沈没しなかったところに住んだなどという、ありえない前提によったものだった。

これまでにオセアニアでおこなわれた人類学、考古学、言語学、遺伝学などの研究は、オーストロネシア語を話す人間集団が、今から三〇〇〇年以上前に東南アジア島嶼部から東へ植民を開始したことを明らかにしてきた。家畜(イヌ、ブタ、ニワトリ)や栽培植物(イモ類)を携えた植民は、漂流ではなく意図的に海を渡ったことを示している。

優れた船と航海技術

近い島ならいざ知らず、ハワイのように何日も島影を見ずに海を渡らなくてはならない遠い島へも植民できた背景には、優れた船と航海技術の存在があった。オセアニアの大半の地域では、海流や貿易風に逆らって航海しなくては東へ進めない。帆の角度を調節することで、風上に向かって航海したのは明らかである。

オセアニアの船にはふたつのタイプがあった。ひとつはシングル・アウトリガーカヌーで、船体の片側にアウトリガーが突き出て、浮きの役目を果たす。帆を立てる位置を変えることにより、どちら

の先端をも船首にすることができ、風上に向かって航海することができる。いわゆるヨットのタックル航海である。民博のオセアニアコーナーにあるチエチエメニ号はこのタイプだ。

もうひとつはポリネシアで発達したダブルカヌー(双胴船)である。平行して並んだふたつの船体は、長さ、幅、深さのどれをとっても大きく、空洞なので家畜や苗、食料などを大量に積み込むことができた。ハワイで復原されたホクレア号には一五人もの乗組員が乗り込んだ。

海上で進路を定めるには、太陽や星の位置、潮の流れ、鳥の飛んでいく方向、雲の形などが利用された。代々蓄積され継承された知識と技術は、近代航海器にもひけをとらない。

一方で、島の生活は自然災害に弱い。津波や干ばつの前には人間は無力さを露呈する。にもかかわらず、数千年にわたってさまざまな工夫をしながら人びとは生活し、現代にまで生き続けている。グローバル化した現代世界において、彼らも伝統文化への誇りをさまざまなかたちで発信ははじめている。



オセアニアのブタは人間とともに拡散した
(ミクロネシア・ファイス島)



タロイモとともに重要な主食のヤマイモ(ヴァヌアツ)

カヴァで語り合う

吉岡 政徳
(よしおか まさのり)

神戸大学教授

ノンアルコールで酔う

どの地域をフィールドとする場合でも同じであるが、その地域の人びとがラックスして語り合う場をもつことを我々人類学者は求めている。酒を酌み交わすということが、そうした場を提供してきたことは誰でも知っている。そこでは本音を聞くことができるし、インタビュウではえられない非公式の情報を共有することができて、部外者の我々もその地域の一員になったような気にさせてくれる。アルコールの力は確かに大きく、親密な友好関係もこうした場を共有することから生まれることが多い。わたしがしばしば訪れるヴァアアツでは、こうした場は酒によってではなく、カヴァによって作り出されている。

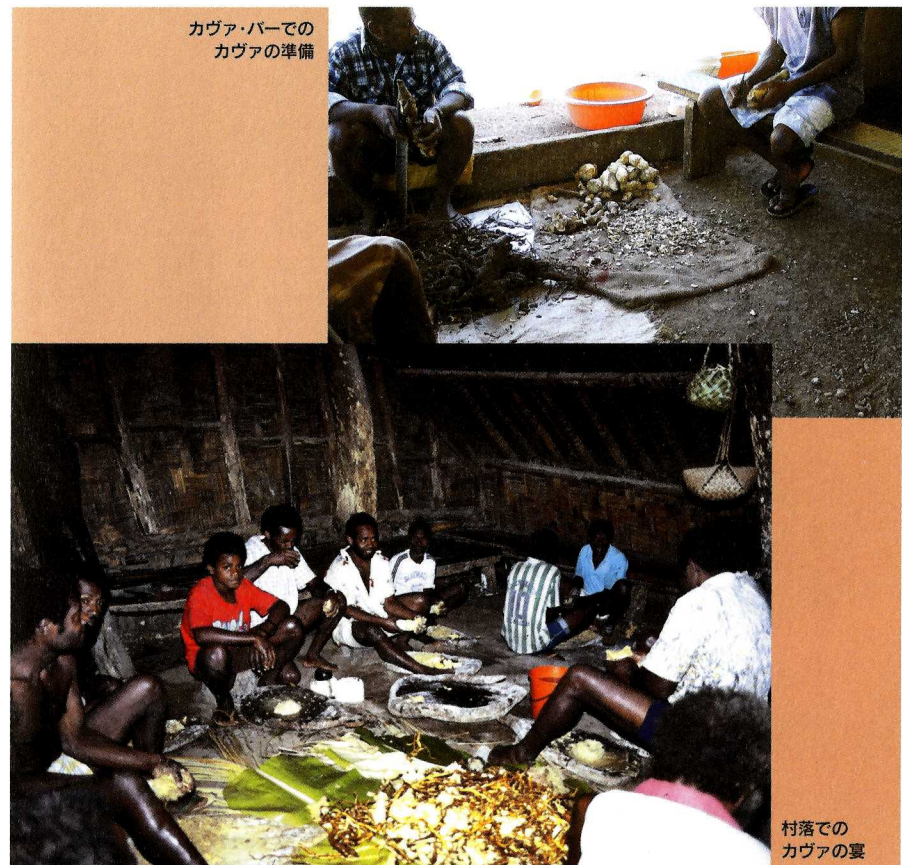
明日の活力を培う

ヴァアアツでは、村落部でも都市部でも夕方にはカヴァが飲まれる。都市部には、カヴァを飲ませるバーが無数にあつて、人びとは仕事が終わると三々五々これらのバーに集まつて、一杯一〇〇円程度のカヴァを楽しむ。これらのバーでは、電気は使わずにアルコールランプを使う。村落を思わせるし、明るすぎるランプは眼に刺激がきつい。薄暗い店内では、いくつかがグル

カヴァというのはコシヨウ科の灌木で、その根を砕いて水と混ぜ、浸出液を搾り出すことで、同名の飲み物ができあがる。カヴァには、アルコールではなくアルカロイド成分が含まれている。アルカロイドというのは薬物系であるが、カヴァのそれは毒性や依存性がほとんどないので麻薬というわけではない。しかし、酩酊や多幸感など薬物と類似の効果をもたらす作用がある。樹液に水をどれだけ混ぜるかによって、また、木の産地、種類、成長の度合いに応じて「強さ」が変わるが、強いカヴァは一杯飲んだだけで、体が急に軽くなり、自分の周りの世界が自分からは遊離したようなふわっとした状態になる。しかし、アルコールとは違って騒々気分になるわけではなく、沈静作用があるため、静かに酩酊し、静かに語り合うことになる。

ープが静かに話している。なじみの店は、同じ島の出身者の経営するバーである。しかし、それらのなかでも、もちろん、味のよいカヴァを出すバーが繁盛する。強すぎるカヴァはいがらっぽくてのど越しが悪い。弱すぎるカヴァは水みたいで、酩酊作用がない。のど越しが水のように滑らかだけに、

適度な酩酊をもたらすカヴァが美味しいカヴァなのだ。サラリーマンも、出身の村落を思い出しながら、明日の活力をこのバーで培っていく。我々部外者はというと、このバーで見ず知らずの人びとと静かに語り合う。わたしのオセアニア研究の楽しみのひとつである。



カヴァ・バーでのカヴァの準備

村落でのカヴァの宴

オーストロネシアン —ことばで結ばれた人びと—

菊澤 律子
(きくさわ りつこ)

本館先端人類科学研究部

もつとも広く分布

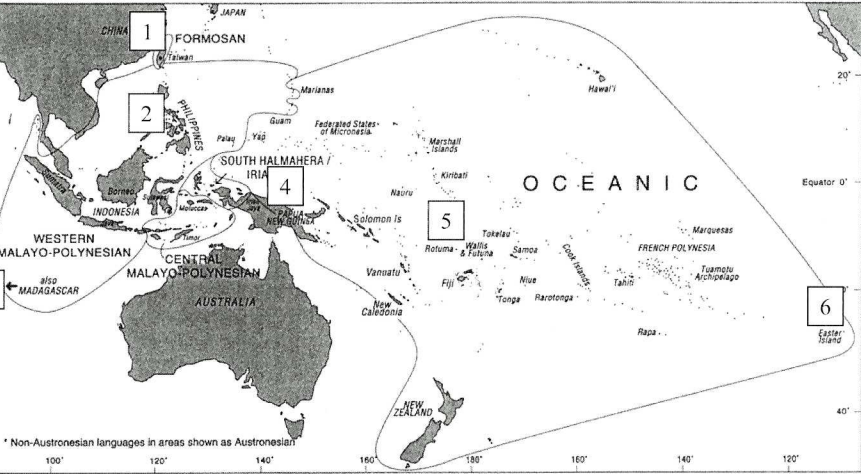
オーストロネシア諸語とは、今から五〇〇〇年ほど前に台湾で話されていた「オーストロネシア祖語」から発達した言語のことをいう。そしてこの言語の話者たちをオーストロネシアンとよぶ。今から約五〇〇〇年前に台湾を出発したオーストロネシアンたちは、フィリピン・インドネシアを経てポリネシア、メラネシア、ミクロネシアなどの太平洋全域に広がった。さらにはインド洋の向こうにあるマダガスカルに定住した人びともいた。その結果オーストロネシア諸語は、地理的にももっとも広い分布を見せる言語族として知られている。ちなみに構成言語数は約一一〇〇言語となっている。

時間軸で結び付く

地球上の約三分の二に広がるオーストロネシアンたちの周辺は、気候、植生、地形などじつに多様だ。そのことばを見ると、人びとが新しい土地で新しいものに遭遇したときのことばがわかって面白い。たとえ

ば蚊を示す語は、nyanus(ホルネオ島・ガジュタヤクなど)、noom(ミクロネシア・サタウル語)、nanu(フィジー語やポリネシア諸語の多く)など、いろいろ異なる言語で類似したかたちが見られるが、ニューギニアランドのマオリ語ではnanuといえは、この当地名物砂バエのこと。やっと到着した新

天地で遭遇した吸血性のこの虫は、夜中に聞こえる蚊の音以上にうつつとおしく感じられたことだろう。本物の蚊のほうはいえは、waioaというまったく違う名前ではよばれるようになった。また、フィリピン・インドネシア地域で食用、薬用、儀礼、染料の採取など多様な場面で用いられるウコンは、kungやkuniなどよばれるが、マダガスカルや北東海岸地域では同じ語源から発達したnintiaという語がつる性植物の一種を指す。植物の形態はまったく違っているが、根から染料をとる、という機能の上での共通点から、新しい土地で見つけたこの植物をウコンと同じ名称でよぶようになったものと考えられる。

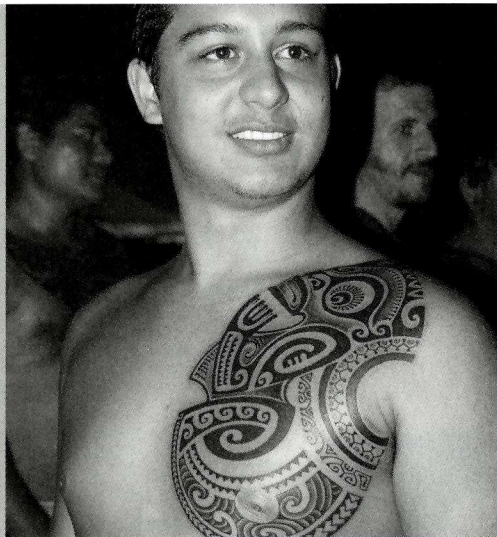


言語 (話されている場所)	目	空	道	手	2	3
1 バイワン語 (台湾)	matsa	kalevlevan	djalan	lima	dusa	tjelu
2 ポントック語 (フィリピン)	matá	dáya	dálan	lima	duwá	tulú
3 マラガシ語 (マダガスカル)	máso	lánitra	lálana	tánana	róa	télo
4 マナム語 (パプア・ニューギニア)	mata	lang	jala	debu	rua	toil
5 ツバル語 (ツバル)	mata	lagi	ala	lima	-	tolu
6 ラバ・ヌイ語 (ラバヌイ(イースター・島))	mata	rangi	ara	rima	rua	toru

与えられた環境に適応しつつそれぞれが独自の文化を発達させたオーストロネシアの諸社会は多様で、言語以外の要素ではひとつくりにすることができない。またその言語も、長い年月をかけて分岐を続けてきており、今ではそのまま話して互いに通じるわけではない。それでも専門家の目をおせば系統を遡ることができ、空間のみならず時間軸をおして見えないところどころと結び付いているのである。

オセアニア

特集



タトゥーネシア(2005)に出品されたシメオンの作品(タヒチ・モーレア島)

タヒチのタタウ

桑原 牧子
(くわはら まきこ)

金城学院大学准教授

「タトゥーネシア」というタトゥー・コンベンション(刺青の彫師やタトゥー愛好家が集うイベント)が、二〇〇五年にはタヒチのモーレア島で、二〇〇六年にはタヒチ島で、仏領ポリネシア内と世界各地で活躍する彫師を招いて開催された。連日、ブースからマシンの音が響きわたり、タタウ(タヒチ語で「刺青の意」)愛好

家のみならず、観光客、地元の若者、子ども連れの家族で賑わった。タタウ・コンテスト、知的所有権や衛生問題についてのワークショップ、写真展とビデオ上映など、タタウ関連のイベントのみならず、ダンス・ショー、ファッション・ショー、コンサート、伝統工芸の販売、タヒチの伝統料理マア・タヒチの会食など、仏領ポリネシアのフェスティバルではなじみのイベントも数多く催され、ポリネシア文化の一部としてのタタウを満喫できるコンベンションであった。

タタウの伝統は古く、一八世紀に西欧人探検家たちが初めてタヒチを訪れた際、島民の身体に施された幾何学模様や動植物をかたどった模様が観察されている。タヒチの世界観に組み込まれていたタタウは、一九世紀にキリスト教宣教師によって禁止され、約一五〇年もの空白期を経て一九八〇年代に文化復興運動のなかで復活した。タトゥーのグローバル化の波は仏領ポリネシアの島々にも打ち寄せ、現在、タヒチの彫師たちはマシンの使い、自分たちのタタウに、他のポリネシアの模様、トライバル・黒のみの彩色で、流線型で先が次第に細くなり最後は尖ったもの、日本の刺青、欧米のタトゥーのデザインやスタイルをとり入れながら彫っている。

近年、タヒチのタタウの価値は、仏領ポリネシア内の文化復興運動とエスニック・アイデンティティ構築のみならず、グローバルなタトゥーの世界とのつながりのなかで生まれている。「タトゥーネシア」は、グローバルなタトゥーの世界にタヒチのタタウを紹介するとともに、タヒチの彫師が海外のさまざまなスタイルや技術を学び、欧米や他のポリネシアの彫師とのネットワークを築く絶好の機会となったといえる。

オセアニアの災害文化

林 勲男
(はやし いさお)

本館民族社会研究部

同種の災害を頻繁に経験してきた土地には、災害に備えるための知恵が育まれていることが多い。災害研究の分野では、総称して「災害文化」とよんでいる。日本では、木曾川流域の輪中や、東北の三陸沿岸地方に言い伝えられている「津波でんでんこ」などがよく知られている。後者は、津波の危険性があるときは、家族の安否を気遣って探すよりも、先ずはバラバラに逃げることを教えるものである。現在の「災害体験を風化させるな」「災害の教訓を伝えよう」との動きは、あらたな「災害文化」の創造を目指しているともいえる。

南太平洋の島嶼間の交易も、それぞれの自然環境の相違を背景にしたセイフティネットとしての「災害文化」と見ることができるといえる。ミクロネシアのサウエイ交易やニューギニア島パプア湾沿岸のラカトイ交易なども、緊急時のセイフティネットの形成機能をもっていたと考えられる。しかし、こうした歴史のなかで形成された災害文化にも、限界があることも確かだ。

二〇〇四年十二月、インド洋で津波による巨大災害が発生した。そのとき一九六〇年に南米チリ沖で地震による津波が発生し、ハワイ諸島や日本の太平洋岸に大きな被害をもたらしたことを思い出した人も多かったであろう。また、進行する地球温暖化は、熱帯性低気圧の発生頻度や規模を拡大するともいわれ、エルニーニョを含む気候変動による海面や海水温度の上下動や干ばつ・集中豪雨の発生も、人間生活に多大な影響を引き起こしている。一九八二年から翌年にかけて、また一九九七年から翌年にかけて、エルニーニョ現象の影響で、西太平洋各地は深刻な干ばつに見舞われた。災害の因果関係が地球規模に複雑化しており、国際的な対応のとり組みが始まっている。ダーウインはガラパゴス諸島を「進化の実験室」とよんだが、オセアニアの島々は、今、人類生存への警告を発している。



濁水被害で干上がったヤップ島内のダム(1983年5月)

「ホエール・ライダー」とマオリ社会

内藤 暁子
(ないとう あきこ)

武蔵大学教授



マオリの少女たち

二〇〇三年に「ホエール・ライダー(クジラの島の少女)」というニュージーランド映画が注目を集めた。主人公の少女を演じたケイシャ・キャッスル・ヒューズが史上最年少でアカデミー賞主演女優賞候補となったことは、この映画の国際的評価の高さを物語っている。監督はマオリ女性ニキ・カーク、原作はマオリ作家ウイティ・

イヒマエラである。イヒマエラがこの物語を書いたきっかけのひとつは、娘から「なぜ、映画のヒーローはいつも男の子で、女の子は決まって、助けてー!」と叫ぶのかしら」と問われたからだという。彼は、祖父(長老)から否定され続けた少女がやがて救世主として象徴的に生まれ変わり、指導者として一族や地域社会に受け入れられる物語を、神話を題材として創りあげていった。

しかし、映画の舞台になった地域のマオリ社会は、女性も指導者に擁護したことで知られている。こうした前提は原作には登場するものの、映画では触れられておらず、無垢な少女が男性社会に立ち向かうという単純な設定になっている。祖父と少女の葛藤はスピリチュアルな存在としてのクジラによって一飛びに克服されてしまふのだ。加えて、クジラをとおしたヒュアな先住民イメージの投影も気にかかる。

とはいえ、マオリ文化における神と自然の結び付きを考えるうえで、映画におけるクジラの描き方は示唆に富む。原初、万物は神々がもたらした子孫であり、すべてを包み込む結び付きは調和がとれ、人びともそのなかにあった。少女の一族にとって、クジラは神話や祖先と結びつく聖なる使いであり、かつ貴重な資源であった。クジラを海に戻し復活できたことは、西洋化が進みアイデンティティが揺らぐマオリ社会において、マオリらしく生きることの困難さと可能性、そして素晴らしさを暗示するものである。

最後に、この映画でマオリに興味をもった方には、現代マオリ社会の苛酷さを描いた映画「フランス・ウォリアーズ」も併せてお勧めしたい(本映画は、一〇月二十八日に民博講堂で無料上映される)。

特集 オセアニア

サモア諸島の女性用帽子(左から標本番号H137818、H137823、H137822)



ニューアイルランド島の
マランガン彫刻
(標本番号H144390)



モノ グラフィ

ジョージ・ブラウン コレクション

林勲男(はやし いさお)
本館民族社会研究部

民博は、メソジスト教会ウエズリー派宣教師ジョージ・ブラウンが、一九世紀末から二〇世紀初頭にかけて南太平洋で収集した、三〇〇点を超す民族誌標本資料の大型コレクションを所蔵している。英国のニューキャッスル大学から国際競売会社ササビーズを通じて売りに出されたものを、一九八六年に購入したのである。

ブラウンは生前に数多くの自然誌や民族誌の標本を収集している。その活動や収集をめぐる人間関係の詳細については、シドニーにあるニュー・サウス・ウェールズ州立ミッチェル図書館が保管する彼の日記や手紙から窺い知ることができる。やはりシドニーのオーストラリア博物館が所蔵する、ブラウン自身の撮影による九〇点を超すガラス乾板

も、重要な手がかりを与えてくれる。宣教師として最初に赴任したサモア諸島では、ブラウンの博物学的関心は、民族誌ではなく、むしろ鳥類を中心とした自然誌標本にあった。彼が民族誌標本の収集にも関心を向けるようになったきっかけは、後にケンブリッジ大学考古人類学博物館のキュレータとなった若き日のアナトール・フォン・ヒューゲルと出会ったことである。ヒューゲルと親交があったのは、ブラウンが四四年間のサモア諸島での伝道活動を終え、一旦シドニーに戻った後、次の赴任地であるビスマーク諸島に赴くまでの一八七四年一月から翌年六月のほぼ半年間であった。ヒューゲルもブラウンと同様に鳥類標本を収集していたため、意気投合したのである。

ヒューゲルの民族誌標本の収集方法は、当時の宣教師や入植者たちの大半が、単に「未開」や「野蛮」を表象する「珍品」として収集していたのとは異なり、現地名、材料、交易品としての重要性なども入念に記録していた。また彼は、生活のさまざまな場面で使用されていたものを広範囲に集めることに努めていた。後にもとをわかつことになったが、ブラウンはこの若き博物学者から民族誌標本の価値と収集方法について多くを学んだようである。

あらたな伝道地ビスマーク諸島のポ

ート・ハンターに到着してからは、ブラウンは鳥類や植物の標本採集に加え、民族誌標本も収集し、オーストラリア、ニューギランドそして英国の博物館や大学の研究者に寄贈している。また自身のコレクションのための収集も始めている。その後、当時の西洋文化の影響を示す器物も含め、じつにさまざまなものを彼は収集した。

ブラウンは、一八九三年にシドニーの北部郊外のゴードンに家を購入した。その家はポート・ハンターで住んでいた場所の地名にちなんで「キナワヌア」と名づけられた(後に所有者が変わると「ウインザー・ハウス」に改名された)。この家の南側には増築した一棟が続いており、広々としたその部屋に、彼は南太平洋の島々で集めた博物誌標本を保管していた。彼は一九一七年四月七日夜、この家で八二歳の生涯を閉じたが、その訃報を伝える新聞記事は、この一室についても言及し、博物館さながらであると伝えている。

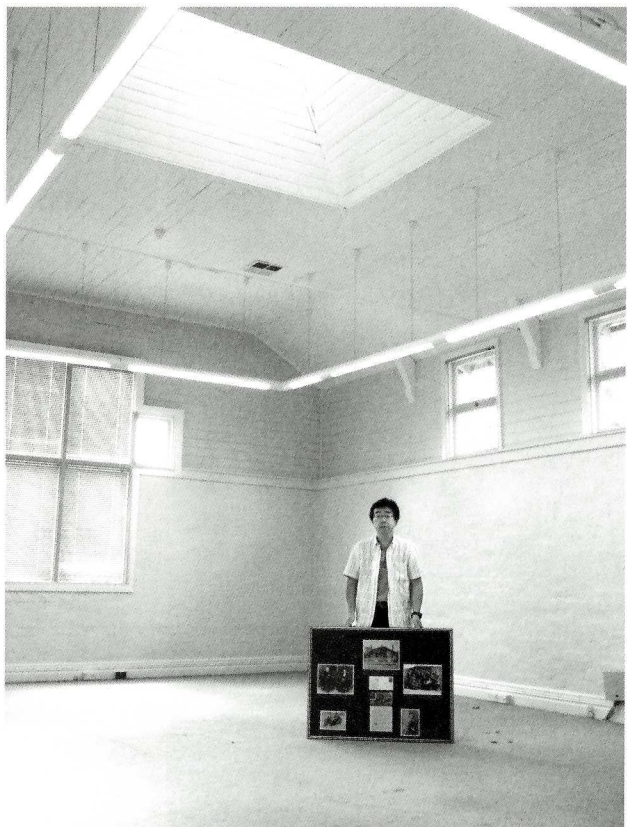
ブラウンの死後、妻のサラは二人の娘たちとこの家に暮らしていたが、彼女が一九二三年に亡くなると、おそらく家は売却されたのである。娘たちはローズヴィルに移っている。ちなみに、彼女たちのうち、長女メアリーはシドニー大学の最初の女子卒業生二名のうちの一人であった。

遺族は博物誌標本について、ブラウンの名を残すものであり、分散させるこ

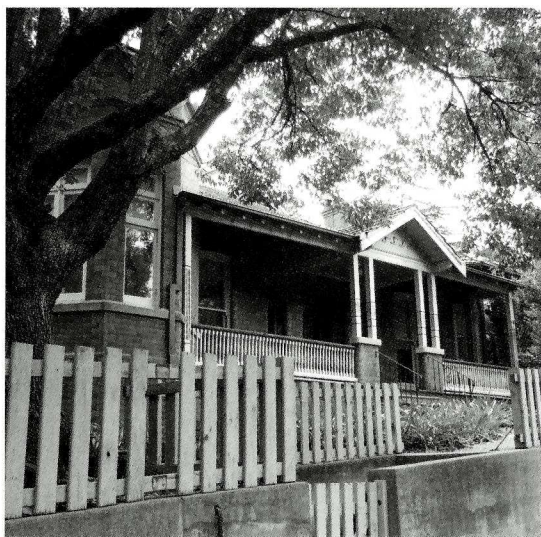
となくひとつのコレクションとして、博物館に展示・収蔵されることを強く望んだ。そして、ブラウンの生まれ故郷であるイングランドのバーナード・キャスルにあるポウズ博物館へ売却した。一九二一年のことである。そして一九五四年、財政上の理由からポウズ博物館は、このコレクションをニューキャッスルのキングズ・カレッジ(現在のニューキャッスル大学)へ転売した。しかしまたしても、ニューキャッスル大学は大学の運営資金確保の必要に迫られ、コレクションの売却を決定したのであった。ブラウン自身同様、彼のコレクションも転住を繰り返したわけである。

一九九九年春、コレクションは民博の特別展として公開された。民博がこのコレクションの終の棲家となることを願っている。

博物誌資料が保管されていた部屋と筆者



母屋に向かって左手奥が
博物誌資料を保管した建物

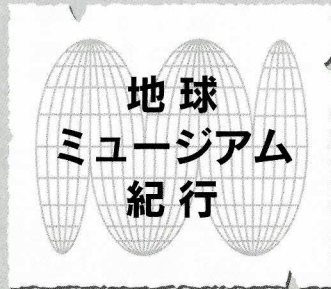


シドニー郊外に現存する
ブラウン一家が住んでいた家

帆の都市のミュージアム

ピーター・J・マシウス

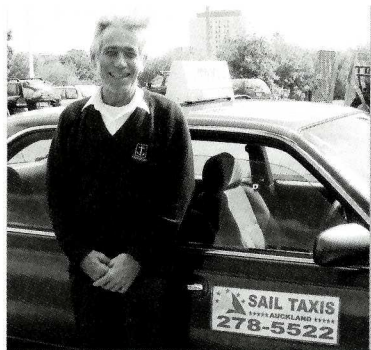
本館研究戦略センター



オークランド博物館／
ニュージーランド

なのだがそのタクシー会社の名前は「Sail Taxis」であった。もちろん、「ヴァカ モアナ」展とは何の関係もないけれど、その社長はオークランドに移住したインド系フィジー人だし、運転手自身も、パプアニューギニアの島々を回る小さな貨物船の船長だったと言っ。

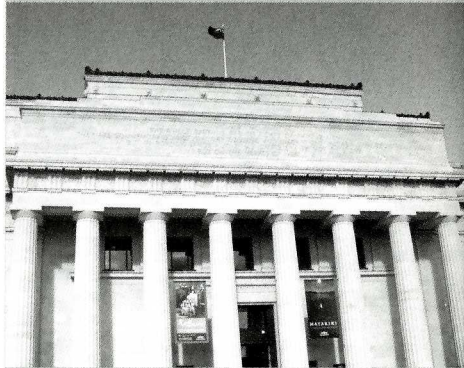
オークランド博物館は、市と太平洋の歴史にまつわる数々のテーマを展示しているが、博物館を一步出てみると、このように、身の回りに実際に生きている歴史を見つけてることができるのだ。(和訳：久保正敏)



Sail Taxisと運転手



「ヴァカ モアナ」で展示されたスポーツ・カヌー



オークランド博物館
外観



アメリカズカップにも出場したヨットと
オークランド博物館(矢印の建物)



ニュージーランドの人びとは、自国を熱帯太平洋に属しているというよりは、独立した存在と考える傾向が強い。ちょうど、日本人がアジアの一員であるというよりは、日本の独自性を意識することが多いのと同じ。

ところが、わたしの故郷であるオークランドに関しては、少し事情が異なる。熱帯太平洋諸国からの移民をニュージーランドの他のどの都市よりも数多く受け入れ、大きな港をもつオークランドの市民は、周囲の海を愛し船遊びが生活の一部となっているため、他のニュージーランド人よりも、太平洋地域との一体性を強く感じているようだ。オークランド市のスローガン「City of Sails (帆の都市)」は、こうした市民の気分を代弁している。人びとが「オークランドはポリネシア最大の都市だ」と自慢げに語る時、フィジー、トンガ、サモア、クック諸島、ニウエをはじめ多くの太平洋諸島民の移住先がオークランドなのだ、という少なからぬプライドが垣間見える。もともと実際のところ、近年のディアスポラ(故郷を離れて暮らす人びと)は、ニュージーランドのみならずオーストラリアや北米までを含む太平洋を広く移動しており、オークランドだけが唯一の移住先ではないのだが。

最近、わたしは、オークランド博物館の企画をもとにした民博特別展「オセアニア大航海展」の準備のために、何度も同博物館を訪れる機会があった。オークランド博物館の企画した国際巡回展「ヴァカモアナ」は、オーストロネシア語を話す人びとが果たした初期の大航海の歴史と方法を物語るものである。事実、彼らの一部は、数百年前に、タマキ(オークランド地峡のマオリ語読み)近辺に到達している。人間が住み始めた当初から、オークランドの歴史は帆に強く結び付いているわけだ。

二〇〇七年四月初め、四カ月にわたった「ヴァカモアナ」展の閉幕式が終わって博物館を出たわたしは、ヨーロッパ人の子孫である陽気なニュージーランド人タクシー運転手に出会った。まったくの偶然

タノアを囲んで

儀礼用鉢(標本番号H84912、高さ/22cm 幅/54cm 奥行/53cm)フィジー

白川 千尋(しらかわ ちひろ)

本館先端人類科学研究部

表紙の写真で使われているのは、フィジーの木鉢である。見てのとおり重心が低く、鉢の部分を四本の短い脚で支える格好になつていて、しつかりとした安定感がある。なかには、これよりも大きなものや脚が多いものもあるが、いずれにせよ、堅木の丸太を彫り抜くようにして作ったものが多いようである。

タノアとよばれるこの木鉢は、伝統的に訪問者を歓待する儀礼などで使われてきた。儀礼では、村を訪れた賓客に対して、村のリーダーである首長がヤンゴナという飲み物をふるまう。このときそれを入れる容器として使われるのがタノアである。首長をはじめとする村の人びとと訪問者はタノアを囲み、ココヤシの実の殻などでできた椀にヤンゴナをよそつて順に飲む。

ヤンゴナは、より一般的にはカヴァという名前で知られ、フィジーの隣国のヴァヌアツトでも知られる。フィジーの隣国のヴァヌアツトでも知られる。



アツやサモア、トンガ、さらにはミクロネシアのポーンペイ島などでも飲まれてきた。

コシヨウ科植物の根から搾り出した液体は一見すると泥水のように、苦み走つたその味は漢方薬のようでもある。

かつては「カヴァ酒」と紹介されることもあったが、カヴァは酒ではなく、アルコールの作用とは正反対の沈静化作用をもたらす。酒を飲み過ぎると興奮して喧嘩を始める人がいるが、そんな厄介な人でもカヴァをたくさん飲めば、静かになつてやがては眠り込んでしまふだろう。そうした作用をもつこともあつてか、ヴァヌアツトでカヴァは争いの調停や和解の際にも飲まれ、平和と友好の徴と目されてきた。隣国の例とはいえ、そのようなあり方を思い浮かべるならば、タノアを囲んで村の人びとと訪問者がヤンゴナをとくに飲むという先のフィジーの儀礼も、理に適つたものであることがわかる。



アーミッシュのんびとのコミュニケーション —アメリカ合衆国における静かな試み—

鈴木 七美

(すずき ななみ)

本館先端人類科学研究部

ニツケル・マインズ 銃撃事件の波紋

六月に三年ぶりであるペンシルヴェニア州ランカスター郡を訪れると、緑のトウモロコシ畑が地平線まで続く変わらぬ風景が広がっていた。馬車が乗用車と同じ舗装道路を行き交い蹄の音がして馬糞の匂いも漂っている。今回は「アメリカのアーミッシュ」というテーマの国際学会で、一九九九年から京都文教大学文化人類学の学生たちとこの地で調査してきた経過を報告した。会場には研究者たち、伝統的服装に身を包んだアーミッシュの人びと、そしてメテアや警察関係の人まで詰めかけていた。

アーミッシュの起源は、一六世紀スイスの宗教改革急進派アナバプティスト(再洗礼派)に遡る。迫害を逃れて新天地を求め一八世紀に移住したアーミッシュは、もともと保守的とされるオールドオーダーのグループが一般社会と分離しかつてと変わらぬ生活を目指していること、高等教育に反対でワンルーム・スクールで八年生までの教育に限定していること、非暴力の主張から戦争や軍隊を否定していることから、常にアメリカ社会に波紋を投げかけてきた。最近は人口が増加しコミュニケーションが拡大していることでも注目を集めている。現在とはとりわけ、二〇〇六年一〇月に起きたワンルーム・スクー

ルでの銃撃事件によって静かな地域は多くの人びとに知られるようになった。無抵抗の少女たちが犠牲となったことはもちろんだが、事件直後にアーミッシュが銃撃犯を「許すこと」(forgiveness)を表明したことが伝えられ話題となっている。

アーミッシュのメッセージ

長きにわたって学生たちやわたしとも歩いてくれたアーミッシュ・メノナイトのAは大分年をとった。きまりに従わないメンバーに対し社会的忌避(shunning)を実践するオールドオーダー・コミュニケーションから離脱して以来、忌避(shun)され続けてきた。いちばん辛いのは、家族が苦しんでいるとき、助けることが許されないことだという。

彼女に勧められてわたしは犠牲となった少女たちの関係者を訪問することになった。近くに来たら必ず声をかけるのがこの辺のつきあい方なのである。といっても、現代社会の悪を呼ぶと警戒されて電話はないので、一軒ずつ戸を叩く。裸足で出てきたメノナイトのAは、「許し」について、「リベンジ」を思わないことによつて被害者が「日常生活として今日を生きていること」「コミュニケーションが明日に備えること」と解説してくれた。だが子どもにも「許すこと」を伝えるのは難しいという。三人の娘が巻き込まれ一人を失ったしは「子

どもは八人いたが今は七人」と語り、治療中の娘の経過を細かに伝えた。銃撃事件後この地では、教派をこえて人びとが語り合うさざめきが聞こえるようだ。もとアーミッシュ・メノナイトで現在はモダン・メノナイトとして会社を経営するHは、スポーツスマンを務め、世界各地から寄せられる手紙や見舞の品を彼らに届けている。

ランカスター郡アクリンには北米でもっとも大規模なメノナイトを中心とした、世界の災害・貧困・紛争地への援助組織がある。フェアトレードを謳う店舗「一万の村」も北米各地で展開してきた。近年宗教上の紛争調停への参加を試みている。訪ねると、アーミッシュも生活様式を変えずに活動に加わられるよう工夫が凝らされている。メノナイトとアーミッシュは宗教的実践の違いから反目し分離してきたが、近年は同じ目的にむけて協力する姿勢が顕著だとAも語る。姪のメノナイトRの教会でも、最近では信条によつて異なる衣装をつけた人びとがともに礼拝するようになった。Shunに悩む元アーミッシュへの支援にもさまざまなグループがかかわっている。信念を保持し差異を認識しつつどのような協同の実践が可能なのか、世界から距離をとるアーミッシュたちがメッセージを投げかけているのかもしれない。

人生は
決まり
文句

あいまいな「アーマイ」

磯貝 日月

(いそがい ひづき)

総合研究大学院大学文化科学研究科

魔法のことば

ヤマハ製のモーターが付いた船外機ポートが極北の海をゆつくりと走っていく。無機質な太陽は極北の大地を照らし、八月初旬ではあるが、冷たい風がかすかに肌にささる。空と海の青一色の景色のなか、ポートの上には無口な父と多弁な子。わずかな夏のあいだ、極北の民イヌイットはポートを使った狩猟、漁撈を営む。ポートを海岸に止め、小高い岩で双眼鏡を覗き込みながら、子は父に問いかける。「どこに行こうか?」「アーマイ」「何を探そうか?」「アーマイ」「あのあたりにカリブー(トナカイの一種)がいるんじゃない?」「アーマイ」。父の返答はすべて「アーマイ」。イヌイット英語辞書で調べると、「アーマイ」は「don't know(わからない)」と載っている。だが、イヌイットの村に滞在していると、「アーマイ」には、「わからない」以上の意味が込められているような気がする。「アーマイ」は非常にあいまいであるが、人を魅了する魔法のことばであり、イヌイットの人生観がこのことばでよくわかる。

カナダ極北地方のヌナブト準州内にあるホエール・コーフ村。人口およそ三〇〇人の九割近くがカナダの先住民イヌイットだ。ハドソン湾西岸に位置するこの村は豊かな動植物に囲まれている。村をぶらぶらと歩いて、イヌイット同士の会話

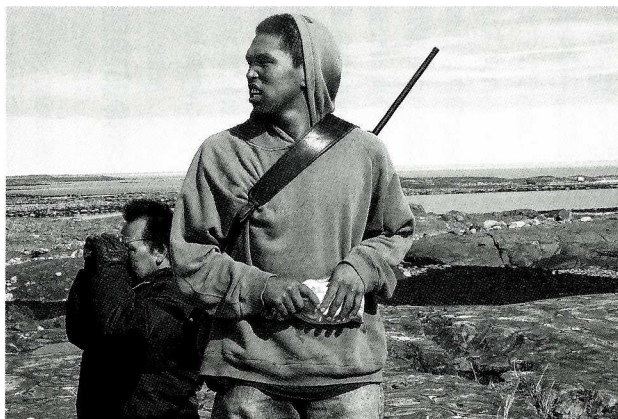
を聞いていると、イヌイットが日常的に「アーマイ」を使用しているのがわかる。「わからない」という意味でも用いるが、「なんともいいがたい」「それはこうだけれど、あなたには教えない」「それはいわなくても、わかるだろう」「そんなことは、どうでもいいじゃないか」など、ことばの裏にはたくさん意味が隠されている。行間を読む楽しみが、この「アーマイ」にはある。

父から子へ、孫へ

冒頭の狩猟の場面。父はハンドルを握りあたりを見まわす。子はポートの先端で背中を銃をかつぎ、父とは反対側に目をやる。一〇メートル先の水際でカリブーが水を飲んでいる。子はオレンジ色の耳栓をし、ポートの先端で銃を構える。「もう撃つていい?」「アーマイ」。父は子に狩猟のやり方を懇切丁寧に手とり足とり教えるわけではない。ときに助言はするが、ここでの「アーマイ」ということばには、「息子よ、自分で狩猟のやり方を学びなさい」という意味が込められている。カリブーをしとめ、肉を解体し、息子は内臓にかぶりつく。父と子は肉を食べながら、あのとときはこうだった、ああだった、と話し合う。

「アーマイ」にことばの定義をあてはめるのは、むずかしい。「アーマイ」は「アー

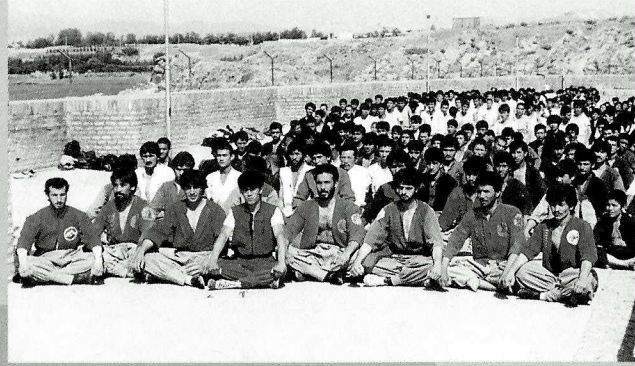
ホエール・コーフ村近くの島でカリブーを探す父(左)と子



マイ」である。人生はあいまいでわからないからこそ楽しい。「アーマイ」を聞きたびにそんな気になる。子には三歳の息子と一歳の娘がいる。「アーマイ」は父から子へ、そして、孫へと引き継がれていく。きつと彼が父親の年齢になり、息子に尋ねられたときにこうこたえるだろう。「今日は何を捕ろうか?」「アーマイ」。



中国少林寺での
モデル演技
(1999年)



イランでのアフガン難民キャンプで青年たちに武術を教える(1991年)



カイサでの文化
イベントに
集った少年たち
(2003年)

マレーシアでのジュニア
武術競技会に参加した
息子(右端)と(2006年)



ヘルシンキの自宅で息子の誕生日を祝う(2005年)

外国人 と 生きる

人権活動家として、格闘家として

庄司 博史 (しょうじ ひろし)

本館民族社会研究部

難民から人権活動家へ

難民としてホスト国に受け入れられた人にも、さまざまな生き方がある。極端な例を挙げてみる。ひとつはホスト国の文化やしきたり、ことなどを完全に自分のものとして受け入れ、早くその多数派の人びとと同じようになろうとする立場である。第二は、これは逆に同化をこぼみ、自分の文化や慣習、宗教を維持しようとする立場で、場合によっては社会との接触まで拒否してしまう。多くの場合、これらふたつのどこか中間に落ち着くのが通常だが、いずれの場合も本人の何かを守ろうとする信念に基づくもので、安易な評価の対象ではない。さらに、三つ目の生き方がある。これは、前述のふたつとはことなり、ホスト社会に対して積極的に働きかけ、変えていくこととする立場である。

誰の目にも、この最後のタイプにしか見えないハメッド・シャファアエさんにわたしが会ったのはもう六年も前、ヘルシンキの多文化センター・カイサだった。行政の移民事業を調査するため何度か足を運んでいるうちに、当時カイサの文化担当職員として働いていたハメッドさんと親しくなった。アフガン難民第一号として、一九九三年二三歳でフィンランドにやってきていた彼は、二〇〇一年にはすでにフィンランドでいくつもの「顔」をもっていた。

カイサは、ヘルシンキ市の運営する多文化センターのひとつで、外国人の文化活動

や市民との交流の場として、一九九五年に設立されている。カイサの職員には外国人が多く登用され、それぞれの言語能力や特技を生かして外国人の文化活動を支援し、また企画運営もしている。ハメッドさんはそのカイサで、移民コミュニティや相互の交流を促進する活動を担当していたが、それを超えた移民文化交流の裏方として奔走する彼を知らない人はいなかった。要するに気さくで世話好きなのだ。

一方、彼はまたアフガン人難民組織の代表者でもある。一九八〇年代末、当時の親ソ政権との対立が、ハメッドさんの五年にもおよぶイランでの難民生活の契機となった。一方、現在二〇〇〇人近いアフガン難民の大部分は、二〇〇〇年以降、タリバンの圧政を逃れてやってきた人びとである。なかには彼の出身民族であるハザラ人のほか本国で圧倒的多数派を占めるパシュトゥン人もいて、本国での民族的摩擦にまつわる対立感情も少なくはない。そのような多様な人びとをまとめ、コミュニティとしてのネットワークを維持するほか、言語や文化を擁護するための活動を組織するのも重要な役割であると思っている。

ハメッドさんはアフガン難民のためだけに活動しているわけではない。フィンランドに受け入れられるまでパキスタン、ロシアなどで、難民生活を経験し、また基本的人權さえ保障されない身分を味わってきた彼は今、フィンランドで人権活動家としても知られるようになった。EUの支援を受け

るヨーロッパ反差別ネットワーク「フィンランド支部」の二〇〇三年設立以来の副代表でもある。二〇〇四年、ヘルシンキで開催された開発援助に関する討論会では、国家元首として人権意識の高いことで知られる「ハロネン大統領」に渡り合ったことが報じられ、「躍名」が知られるようになった。彼の今の夢は、フィンランドの開発援助をアフガニスタンの故郷「バミヤン」の学校教育に向けさせることだという。

武術協会を設立

とはいえ、こんな人権活動家のハメッドさんは、もうひとつ重要な顔をもっている。格闘家ハメッド・シャファアエとしての顔である。アフガン時代からあらゆる東洋的格闘技に魅せられ、難民生活のなかでも腕を磨いてきたという。そしてフィンランドに難民として受け入れられたハメッドさんが真っ先にはじめたのが、武術教室であった。カイサとのつながりもじつは、多文化交流会において飛び入りで披露したカンフーのパフォーマンスがきっかけであった。一九九七年設立した武術・カンフー協会は現在、多くの師範や会員をかかえる組織となり、常時開かれていた武術種ごとのコースにも、何百人もの受講生が参加しているという。最近、毎年のように訓練生をつれ、中国を中心に外国での試合に臨むハメッドさんは三七歳とはいえ、師匠そのものだ。はじめて会ったとき小柄だが、マッチョな雰囲気は凛々

ていたのはそのためだった。人権活動家としては、ややミスマッチなこの側面が彼の生きがいであるのは、公演や指導で各地をとびまわる姿からうかがえる。ひよっとすると、彼がフィンランドでもっとも知られているのは格闘家ハメッド・シャファアエとしての顔かもしれない。

ホスト社会へ働きかけ

ハメッドさんのように第三の生き方をえらぶ外国人はフィンランドでも少なくはない。どの国であろうと難民というレッテルにとらわれず、自由に行動したいのは誰しもそむくところであろう。それでも多くの人は、さまざまな事情で外国人として目立つことを避け、またことばの問題や日常生活に埋没して消極的になりがちなのが現実である。ところがハメッドさんは自分を難民として受け入れたフィンランドに対しても、弱小国の犠牲の上に繁栄する「先進国」としての義務を全うしていない、少数派への差別は消えていない、と歯に衣を着せない。多少疎まれてもことを発し、行動を起こすのは、誰にとっても住みやすい社会にしたいからだという。これは何ごとにも真剣な彼の態度にもあらわれているように、その一貫した言動は、さすががしさと意欲を感じさせてくれる。第三の生き方が社会や周囲にあたえてくれるのは、その内容以前にじつはこの前向きな意欲なのかも知れない。



ングルンデリが棍棒を投げてきた
エンカウンター湾をふちどる小山

マレーコッドが逃げ込んだ
アレキサンドリア湖

マレーコッドが作り出したという
オーストラリア最大の河川マレー河

ンガリンジェリの年長者(左)と
南オーストラリア博物館で働くウィルソンさん

南オーストラリア博物館(正面入り口)
1996年撮影

民博ビデオテーク番組「ングルンデリ神話」
(番組番号 1602)



ングルンデリの神話

地球を
集める

松山 利夫 (まつやま としお)

本館民族社会研究部



オーストラリア

マレー河の河口に暮らしてきたンガリンジェリの人たちは、ほぼこうした内容の神話を語りついできた。それはマレー河の起こりと彼らが漁の対象にしてきた多数の魚の起源、天の河の形成、そして死後の

資源の保証、幸せの保証

マレー河の河口に暮らしてきたンガリンジェリの人たちは、ほぼこうした内容の神話を語りついできた。それはマレー河の起こりと彼らが漁の対象にしてきた多数の魚の起源、天の河の形成、そして死後の

ある日、ングルンデリは二人の妻が歩いてカンガル島へ渡るのを見つけた。彼は雷のような声で叫んだ。「落ちろ！水のなかに落ちろ！」。見る間に潮が満ち、妻たちはおぼれ死んだ。

カンガル島に渡ったングルンデリは、島の西側でヤリを海に投げ捨てて体を海水で洗うと、天へと昇り天の河に輝く星になった。彼は人びとに告げた。「お前たちが死んだら、お前たちの魂はわたしが作ったこの道をたどることになる。そして天に昇り精霊の世界でわたしと暮らすのだ。」

精霊の足跡を追う映像

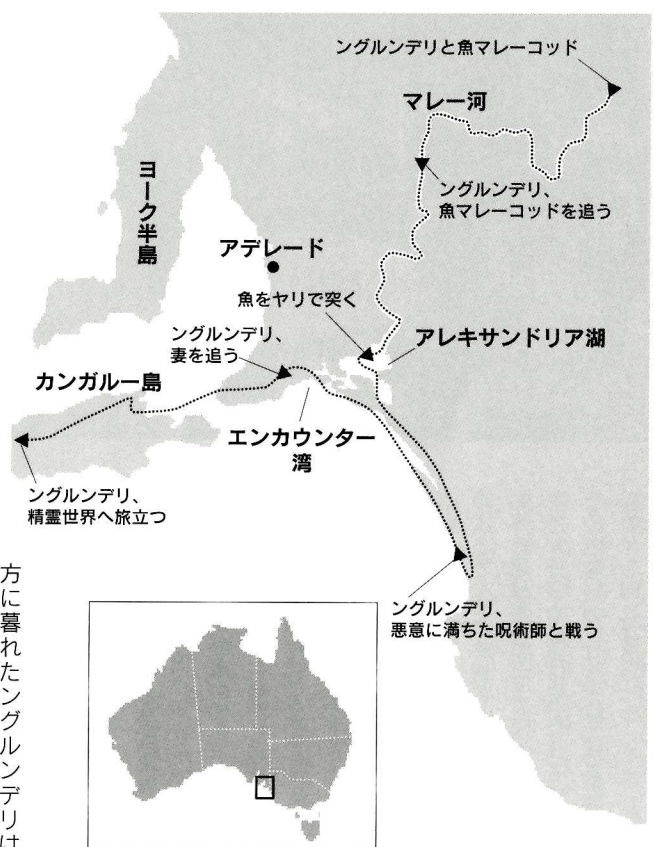
魂の行き先を説明する。それゆえに彼らは、この神話を現代にまで語りつがなければならなかった。つまり、豊かな漁業資源が保証されていることの意味と夜ことに仰ぎ見る天の河の由来、そして死後の魂が精霊ングルンデリとともにあることについての幸せな保証を、日々語り次世代に引き渡す必要があった。

植民地の圧力が強く、早くから都市アレードに出ざるをえなかったンガリンジェリの人びとがこの神話を、年長者の協力をえて映像に納めたのが、本館のビデオテーク番組「ングルンデリ神話」南オーストラリア博物館の展示からである。そのきっかけになったのが、一九九六年当時、南オーストラリア博物館に展示されていたングルンデリの神話を再現したジオラマ(立体模型)であった。展示の紹介にはまるこの番組は、マレー河に集うペリカンをカメラに納め、今も少数のンガリンジェリの人たちが暮らすラウカン・コミュニティを訪問し、アシのあいだからアレキサンドリア湖の水面を写し、クーロングの砂だらけの道を行き、エンカウンター湾にングルンデリの足跡をたずねて構成した。これもまた標本資料に優るとも劣らない「地球を集める」ことなのである。

語りつがれる神話

逃げ出した二人の妻を追って、ングルンデリは樹皮のカヌーで小川を下っていた。カヌーのさきを巨大な魚マレーコッドが泳いでいた。マレーコッドは大きな尾ひれで水を押しわけ、川幅を広げた。やがて魚は湖に泳ぎ出た。魚を見失って途

方にも暮れたングルンデリは妻の兄弟ネベルのことを思い出し、崖に座っているネベルを呼んだ。二人はマレーコッドをとらえるとその肉を細かく刻み、ひとつひとつに魚の名をあたえながら肉片を湖に投げ込んだ。こうしてマレー河とその下流にある湖アレキサンドリア湖には多くの魚がすむようになった。



精霊ングルンデリの旅の道すじ
(南オーストラリア博物館1989年の解説パンフレットによる)

コマンドルスキー諸島
ベーリング島南部にあるベーリングたちの墓



もっとも典型的なハーレム



新生児の数を死亡したものも含めて正確に数える。
個体数の推移を予測する重要な仕事



間引いたオス。毛皮、生殖器をとった後の
肉は飼育用のキツネの餌にする



新生児の10パーセントほどに、日時や場所を記した
モーネル合金の標識を付ける

オットセイ Northern fur seal (学名: *Callorhinus ursinus*)

一夫多妻の罽脚(ききやく)類。サハリンのチュレニイ島、ベーリング海のコマンドルスキー諸島とプリピロフ諸島で繁殖し、個体数は約120万頭と推定されている。5月中～下旬にかけてオスが上陸してナワバリを作り、6月中旬に帰ってくるメスを待ち受ける。上陸して1～2日でお産、その後約1週間で発情・交尾・妊娠する。授乳しながら、胎児を育てる。10月下旬に子育てを終え、皆それぞれ繁殖場ごとに、カリフォルニア沖、三陸沖、日本海の大和堆へと大回遊の旅に出る。



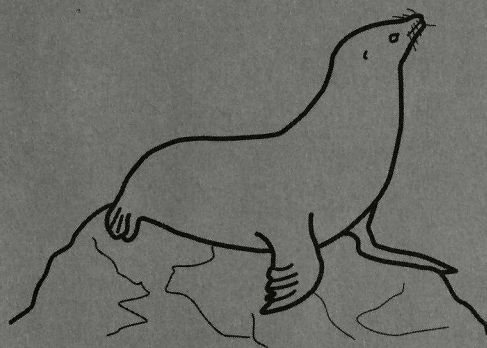
毛皮の発見と乱獲

オットセイが毛皮資源として注目を浴びたのは、ロシア皇帝ピョートル大帝が委嘱したスウエーデン人の海軍大佐、ベーリングの第二次探検がきっかけであった。一七四一年にかるうじてたどり着いたロシアのベーリング島で越冬に失敗したベーリングを初め、かなりの隊員が壊血病で亡くなった。そのような過酷な環境のなかで生き残った隊員たちが、手付かずの資源としてラッコやオットセイの毛皮をもち帰ったのである。

その数年後に始まった猟獲ラッコは両種にとって受難の始まりであった。ベーリング・メドヌイ両島のラッコは一〇年も経ないで絶滅に至り、その後はロシア人によるアリューシャン列島沿いの狂気の猟業活動が続いた。ラッコが獲れなくなれば、追うようにオットセイが同じ憂き目に遭った。一八〇〇年代には露米会社が、当時ロシア領のアラスカに至る広大な植民地経営も兼ねて、毛皮の市場価格の暴落を防ぐために猟獲数制限など多少の管理をおこないだした。

このように陸上での猟獲がある程度管理され出すと、一八六六年ころから海上での猟獲が始まり、陸上の猟獲を上回る水準に達するのにならざるを得なかった。繁殖場をもたなかったイギリスは、プリピロフ周辺海域での猟獲を強行し、米英両国の裁判沙汰にまで発展した。その結果、英国の猟船は拿捕を免れるようになったが、繁殖場周辺海域の猟獲には繁殖期に制限が設けられた。そして、サケ・マスなどを含む河川遡上性の魚を管理する国の海上管理権を認める母川国主義の考え方が初めて導入された。

生きもの 博物誌 【オットセイ】 ロシア



オットセイの受難

和田 一雄
(わだ かずお)

元東京農工大学教授

オットセイの生態管理

生態管理体制が少しずつ整備されるにつれて、生態研究も進み始めた。メスの出産率は七〇〜八〇パーセントとかなり高いため、個体数を維持しながら毛皮資源を維持するには三〜五才のオスだけを一定数捕獲しなければならぬ。捕獲数を抑えすぎるとオスが増えると、繁殖場で新生児を踏み潰したり、メスのとり合いで、メスの死亡率が増加したりする。そんなときにはハーレムをもつ成獣オスやハーレムをもたない未成獣オスを間引くことになる。なお、間引いたオスの毛皮は市場に出荷され、生殖器は乾燥後漢方薬用に輸出、肉は地元で養狐業者に払い下げられる。自然増加率の推定は困難なので、試行錯誤の連続である。ハーレムをもつ成獣オスは繁殖期になるとほとんど絶食してハーレムを維持するが、メスは採食のために定期的に海へ出る。



失せ物を探すには

岡部 真由美 (おかべ まゆみ)

総合研究大学院大学文化科学研究科

の日は入安居なのだ。

東南アジアの上座仏教社会において、雨季の約三カ月間を雨安居とよび、出家した僧侶たちは外出を控えて寺に止住する。その最初の日が入安居だ。雨安居のあいだは、満月、新月と二度の半月のたびにめぐってくる布薩日に年配女性たちが白衣を着て寺を訪れ、持戒して一夜を過ごす。これがノン・ワット(寺で寝る)だ。雨の降るなか白衣に包まれた人たちが仏道に勤しむ静寂な空気に触れたい、とかねてから思っていた。

雨安居最初のノン・ワット。ひたすら、見よう見まねで誦経し、瞑想し、説法に耳を傾けていると、あつという間に終わっていた。

翌朝帰宅してはつと気がついた。カメラがない。

「あれ、どこにいったっけ」。

最後にカメラを使ったのがどこかも覚えていない。大事な写真をちゃんと撮ったかどうかさえあやふやだ。考えれば考えるほど、記憶のあいまいさが浮き彫りになるばかりで、不安が募る。部屋でゴソゴソしている、案の定、お母さんに気づかれてしまった。「ユミ、何やってるの?」

別に、彼女のもち物を失くした訳ではないのに、自分のおつちよこちよいぶりを見透かされているようで、何となく気まずい。仕方なく、「じつはカメラが見当たらない」と白状する。お母さんとお父さ

んは質問を畳み掛け、わたしは歯切れの悪い返事を繰り返す。ノン・ワットに参加した興奮の熱は一気に冷め、ジーンズに着替えてバイクで寺に駆け戻り、いるるな人に聞いて回った。

力を貸して下さい

一日経っても音沙汰はなかった。困り果てたわたしを見て、お母さんは「ゲイオのところへ行く?」と聞いてきた。ゲイオとは、お母さんの姪の一人のもとに降りる男児の霊で、タオルハンカチを指に絡めながら、何ともいえない人懐っこい声で話すのが印象的だ。お母さんのその姪とは、そういえば、他村やチェンマイ市内からも常連客が訪ねてくる人気の霊媒師であった。なるほど、困ったときは何でも相談に行けばよいのだ。その夜早速、わたしは彼女を通じて、ゲイオにカメラが無事に見つかるように力を貸して欲しいと伝えた。ゲイオは「姉ちゃん(筆者のこと)の知らない人がもって行ったけど、盗んだんじゃない。寺で見つかる」と教えてくれた。

次の日、家に居ても落ち着かないので、寺に貼り紙をさせてもらうことにした。話を聞きつけた僧侶たちから、ちょうど同情のことはをかけてもらっていたとき、新しい知らせが舞い込んできた。早朝、沙弥(少年僧)が寺の敷地を掃除してい

「あれ、どこにいったっけ」。わたしはよく口にしている。つい先日も近所のスーパーで、財布を忘れないようにと念じながら、買い物袋に野菜を入れ、家に帰ってみると、鍵を置き忘れていた。スーパーに戻る道すがら、フィールドワーク中のことを思い出した。

カメラがない!

二〇〇五年七月二一日。北タイ・チェ

たときに、大会議棟の前にボツンと置かれていたバッグを見つけ、僧侶に預けたというのだ。バッグを開いてみると、確かにわたしが探し続けていたカメラとその他諸々の物品が入っていた。どつと肩の力が抜けた。

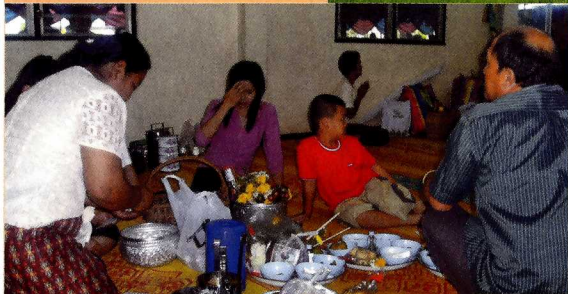
会う人会う人が「見つかったか?」と聞いてくれる。この一部始終を聞かせると、皆は口をそろえて「ゲイオが助けてくれたに違いない」と言う。ずっと探し続けても見つからなかったのに、ゲイオに相談した次の日にすぐ、ゲイオの言うとおりに寺で見つかったのだから。

しかし、お父さんのように「ユミはゲイオを信じるのか?」と、ゲイオの存在そのものを疑問視する人もいる。わたしは、信じることも信じないとも答えかねるが、もしもゲイオが助けてくれたのであれば感謝したい。「早く御礼返しに行きなさい」と言うお母さんにしたがひ、わたしはゲイオが好きそうなおもちや付きのお菓子を買って、また会いに行った。ゲイオとこの場に居合わせた人たちは、わたしの話をともに喜んで聞いてくれた。

物は失くすべからず

その後も度々、わたしはゲイオのお世話になった。もちろん、相談のほとんどは失せ物についてである。カメラの件で、物を失くしてもすぐ見つかるだろうと思っ

一面に広がる水田から、丘の上のお寺を眺めやる



入安居の日は家族総出で僧侶へ食施を



ノン・ワットの常連者。今年も準備万端だ



三カ月におよぶ雨安居も明けて気分すっきり。中央が筆者

開館30周年記念

みんなく ウィークエンド・サロン 研究者と話そう

今月も多彩な研究者が展示場でお話します。展示をめぐるアレコレや、ここでだけ話す民博の研究について、じっくり聞いてみませんか。



東南アジア展示
トラジャの穀倉の
屋根葺き替え作業
(1996年)

■時間：14:30～15:30(予定) ★9月16日のみ、15:30～16:30

■参加費：無料(ただし、観覧券が必要)

* 毎週土曜日は、小学生・中学生・高校生は無料で観覧できます。
ただし、自然文化園を通行して来館される場合は、自然文化園の入園料が必要です。

実施日・話者・話題・場所

9月8日(土)

佐藤 浩司 (文化資源研究センター准教授)
東南アジアの自然と屋根づくり
於：東南アジア展示

9月9日(日)

庄司 博史 (民族社会研究部教授)
世界のことば ことばの世界
於：言語展示

9月16日(日) ★時間 15:30～16:30

林 勲男 (民族社会研究部准教授)
オセアニア展示を読み解く
於：オセアニア展示

9月24日(月・振替休日)

飯田 卓 (研究戦略センター助教)
貝の民族学
於：オセアニア展示、アフリカ展示、中央・北アジア展示

9月30日(日)

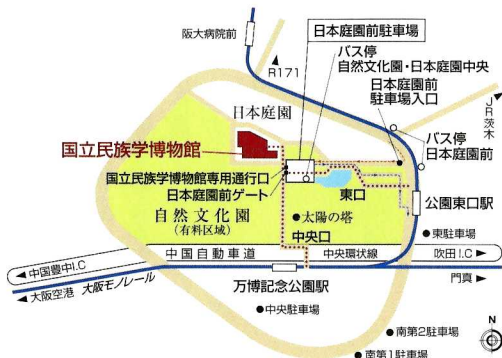
塚田 誠之 (先端人類科学研究部教授)
中国・チワン族の中秋節
於：展示場内休憩所

※ 詳細は、ホームページをご覧ください。

編集後記

ハワイやグアムやタヒチなどは、リゾート地として日本人にはなじみの深い南の島の島々であろう。しかし、それらの島々がオセアニアの一部であるといわれると、わたしたちはとまどうかもしれない。9月13日から始まる民博・特別展「オセアニア大航海展」では、それらリゾート地にも独自の歴史や文化があることで、あらたなまなざしを向けることになるであろう。同時に、日本でいえば縄文時代にオセアニアの海をカヌーで移動した人類に思いを寄せ、その後、各地で形成された文化の変わりゆく姿を知ることができる。

特集の冒頭の地図を見ながら、日本の島々は、オセアニア地域に連続して位置づいているのに、どうしてオセアニアには含まれないのだろうか、海の世界には境界というものが存在していたのであろうかと考える。今月号の特集「オセアニア」は、特別展に先がけて、それらの答えとこの地域のもつ魅力を存分に教えてくれるにちがいない。(池谷和信)



交通案内

■大阪・千里万博記念公園内

- 大阪モノレールで「公園東口駅」・「万博記念公園駅」下車徒歩約15分。
- 阪急茨木市駅・JR茨木駅・北大阪急行千里中央駅からバスで「日本庭園前」下車徒歩約15分(茨木方面から1時間1本程度、日本庭園前駐車場乗り入れのバスがあります。詳しくは阪急バスにお問い合わせください)。
- 自家用車の場合は、万博記念公園「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。
- タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてきます。



次号予告/10月号特集
トイレ

2007年9月号

第31巻第9号通巻第360号
2007年9月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話06-6876-2151

発行人 朝倉敬夫

編集委員 池谷和信(編集長) 榎永真佐夫
久保正敏 庄司博史 山中由里子

協力 財団法人 千里文化財団

制作 株式会社博報堂

製版・印刷 アサヒ精版印刷株式会社

写真提供・協力 7頁中 伊東道子 11頁中 飯田卓

●本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館企画連携係へ
●本誌掲載記事の無断転載を禁じます